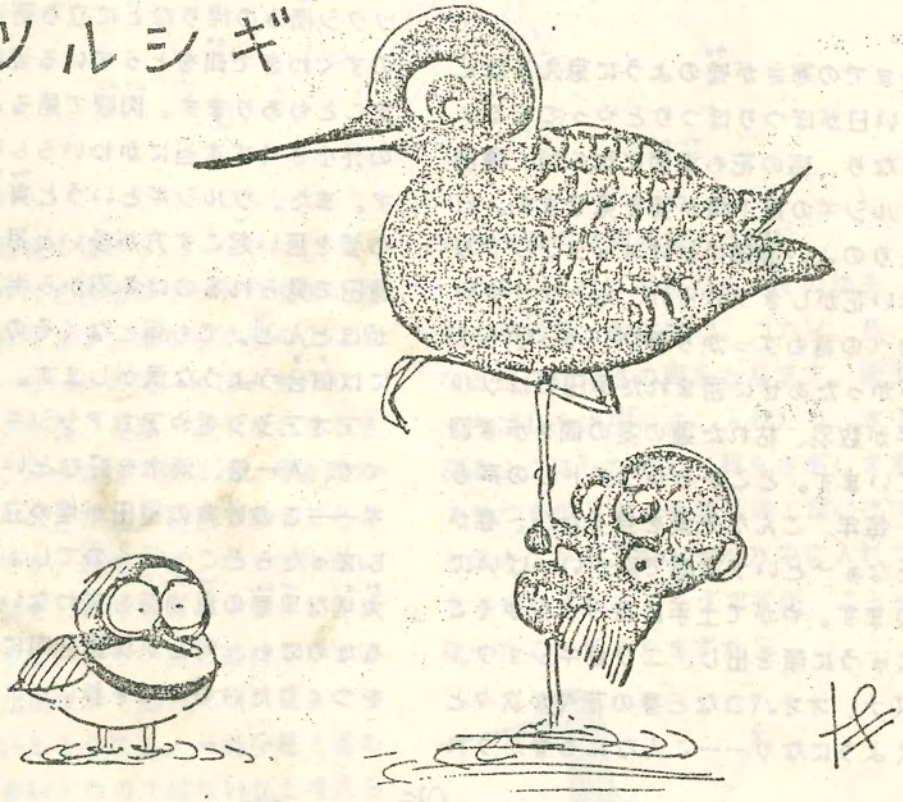
すずがも通信　３７

行徳野鳥観察舎友の会々報　　1986. 4

特集

ツルシギ



[redacted]

特集

ツルシギ

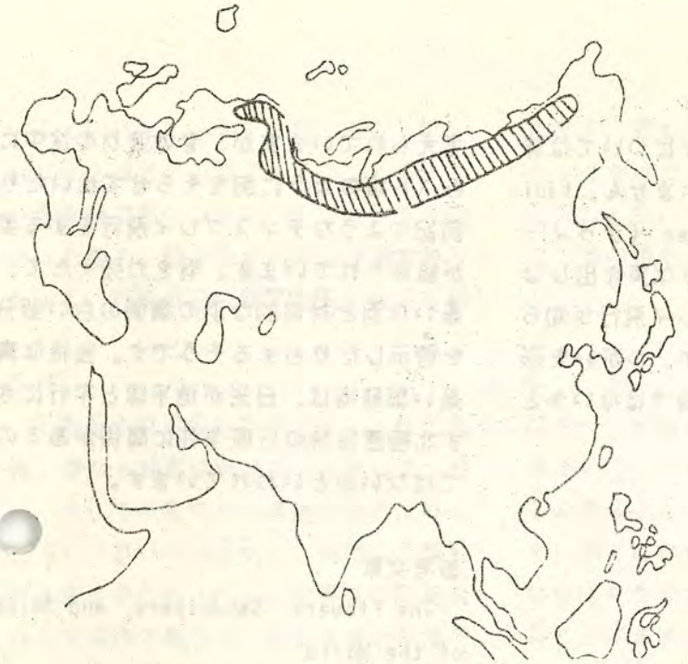
東　馨子

今までに出会ったいろいろな鳥達のことを思い起こしてみて下さい。鳥達の姿だけでなく、その鳥のいた風景が丸ごとスライドのように心の中に映し出されてきませんか？私の場合も同じです。そして私の心の中でツルシギの映し出される風景は、いつもきまって妙典の蓮田なのです。

今までの寒さが嘘のように思えるほど暖かい日がぽつりぽつりとやってくるようになり、梅の花も満開になる頃、蓮田にツルシギの第1陣が姿を見せます。日当たりのよい道端にはオオイヌノフグリの青い花がしきつめられ、ホトケノザやハコベの背もすっかり伸び、うっすらと緑がかったあぜに囲まれた蓮田ではツルシギが数羽、枯れた蓮の茎の間を歩き回っています。どこからかコチドリの声も――毎年、こんな光景を見るたび、春が来たなぁーという実感で胸がいっぱいになります。やがて土手にはツクシがそこらじゅうに顔を出し、ニワゼキショウ、ナズナ、オオバコなど春の花々が次々と咲くようになり……こんなにも春がうれしいのは、やはり自然から、土から、草花から春を迎える喜びがかげろうとなってたちのぼり、私達に伝わってくるからだと思いませんか？

探鳥会などで大勢で見に行くとどうしても遠くの鳥をプロミナ（望遠鏡）で眺めるということになってしまいますが、ツクシ摘みの帰りなどに立ち寄ると、道のすぐわきで餌をとっている姿にでくわすこともあります。肉眼で見ると、思いの外小さくて本当にかわいらしいものです。また、ツルシギというと真黒な夏羽の姿を思い起こす方が多いと思いますが、蓮田で見られるのは冬羽から半夏羽の姿がほとんど。でも何となくその方が蓮田には似合うような気がします。

アオアシシギやアカアシシギなどと比べて、人一倍、淡水を好むというツルシギ――この妙典の蓮田が埋め立てられてしまったらどこへ行くのでしょう。この大切な早春の風物詩を失わないようにするためにも、何とか保護区内に淡水湿地をつくりたいものですね。



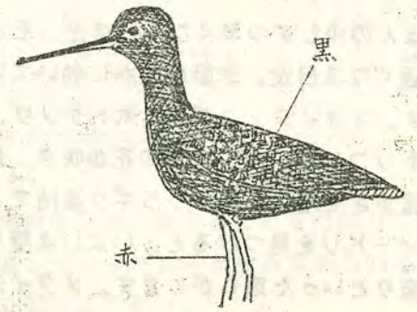
ツルシギの繁殖地

☆子育ては雄の役目？

ツルシギは北極圏のツンドラ地帯の湿地に巣を作ります。草むらや苔の上などに直径6－8cm位の浅いくぼみを作り、内側に草、松葉、枯葉、羽毛などをしきつめます。卵の数は平均4ヶ。卵を暖めてかえすのは主に雄の役目であることが多いそうです。雌の方は、ヒナが小さいうちは世話をしたりもしますが、ヒナが大きくならないうちに巣を離れてしまい、中にはふ化前に巣を離れて南へ渡ってしまう雌もいるそうです。一雌多雄（雄の数の方が多い）なのではないかと考えられていますが、詳しいことはよくわかっていないようです。真黒にビシッときめたツルシギの雄が、これから北へ渡って子育てに四苦八苦なんてちょっとおかしくありませんか？

☆ツルシギは何を食べるの？

ツルシギは、水生昆虫やその幼虫、小型の甲殻類、軟体動物、ゴカイ、魚、蛙など主に動物性の餌をとります。細長いくちばしを水中にさし入れたり、水中を探るようにしたりして餌をさがします。（つつき型とさぐり型採餌）深い水中でも泳ぎながら、頭と首を水中に入れて餌をとったりもするそうですが、ごらんになったことがありますか？



☆ツルシギのディスプレイ

ツルシギのディスプレイについては詳しいことはよくわかっていません。tjuittーtjuee ーtjuee ーtjuee（テゥィーテゥィー？）ときしるような声を出しながら波状に飛ぶディスプレイ飛行が知られているくらいだそうです。つがいを形成するのは繁殖地到着直後ではないかと考えられていますが、春の渡りの途中にもハト類のように胸をそらせて歩いたり前記のようなディスプレイ飛行をする姿が観察されています。羽を力強くたて、黒い体羽と対照的な羽の裏側の白い部分を誇示したりもするそうです。独特な真黒い繁殖羽は、日光が地平線と平行にさす北極圏独特の日照条件に関係があるのではないかといわれています。

参考文献

The Plovers, Sandpipers, and Snipes of the World

Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa

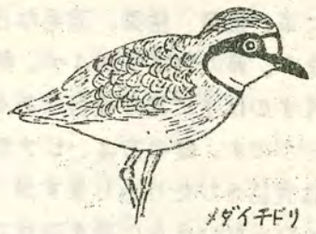
野鳥紳士録

荒井八太

○ツルシギ

ツルシギの名前の由来などは「すずがも通信No．２３(1984.2.1)」に載っています。興味のある方は読みかえしてみて下さい。（編集部）

○メダイチドリ



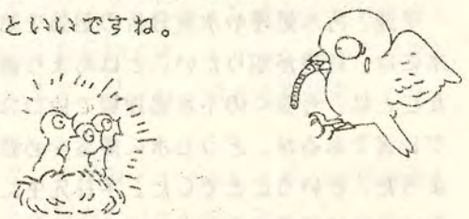
メダイチドリ

ほんの少しずつ早くなる日の出、そして遅くなる日没。季節は微かに動いています。オオイヌノフグリ、ホトケノザ、オドリコソウ、タンポポの花が咲き、風も暖かさを増した頃、ウラギク湿地でメダイチドリを見つけると、いよいよ春も真盛りといった感じがします。メダイチドリ、漢字では「目大千鳥」。干潟で一緒に見られるコチドリやシロチドリに比べ、一回り程大きく、目元もぱっちりと大きく見えるため、こう呼ばれるのでしょう。英名は「Mongolian Plover」。「Plover」というのはラテン語の「pluvia」が語源で、「雨降りの」という意味です。これは、チドリの仲間が、雨季になると群れで姿を現すのでこう呼ばれるそうです。学名は「Charadrius mongolus 」。属名の「Charadrius」はギリシャ語の「charadrius」が語源で、「charadra」（峡谷）に巣をつくるイシチドリを指しているといわれています。種小名の「mongolus 」はラテン語で「モンゴルの」という意味です。コチドリやツルシギで始まった春も、様々な夏羽のシギ達が彩りを添え、野茨の花の香りと共に盛りを迎えます。間もなく、鮮やかな茶色のエプロンをかけたメダイチドリも見られることでしょう。カモで賑わった冬の保護区に、春の華やぎが訪れます。

○バン

「若蘆や夕汐満つる舟溜り」ー村上鬼城。春から初夏にかけて、恋をして、結婚、そして子育てと、鳥達の世界はめまぐるしく動いていきます。保護区で繁殖する鳥の中でも、バンは観察舎の前を流れる丸浜川で巣づくりをする身近な鳥です。バン、漢字では「鵁」。他には「かわからす」、「かわきじ」等の俗名があります。「鵁」という字は中国では「fán 」と発音します。「バン」という呼び名はこんなところからきているのかもしれません。英名は「Common Gallinule」。「Gallinule 」というのはラテン語の「gallinula 」が語源で「gallina 」＋「-ula」（縮小詞女性形）ー「小さな雌鳥」という意味です。学名は「Gallinula chloropus 」。属名の「Gallinula 」は英名の語源と同じくラテン語の「gallinula 」を採用しています。種小名の「chloropus 」はギリシャ語の「chloros 」（緑）からきていて、「緑色の足」という意味です。冬の間は小さな群れで生活しているバンも、春にはなわばりを持ち、雄同士は、なわばりを守るため、すさまじい喧嘩を繰り広げます。必死に守り抜いたなわばりで、バンの夫婦は巣をつくり、ヒナを育てます。ヒナは最初は黒い綿ぼこりの様ですが、６ー７月には、体の大きさも親鳥と余り変わらなくなり、体色は、いかにもクイナの仲間らしい特徴を見せるようになります。

今度、友の会で設置した水車で、丸浜川がきれいになり、魚や亀が戻り、バンのように繁殖する鳥がもっと増えてくれるといいですね。



自然を語る集い ーー サロン・ド・ナチュール

自然を愛する人々が親睦を深め、互いに情報を交換しあえることを目的とした集まりです。特別に話題などは決めず、集まった人達がお茶を飲みながらいろいろなおしゃべりを楽しんでいます。お気軽に御参加下さい。

毎月第２・４木曜日　午後６時半ーー

市川市市民談話室第１集会室　（八幡２ー４ー８）

会費　月３００円　　連絡先 [redacted]

はおと

水が欲しい！

（淡水源開発プロジェクト・寺田一哉）

「水が欲しい！」　これは被爆者の断末魔でも、パリ・ダカールラリーの遭難者の叫びでもありません。湿地のつぶやきなのです。湿地には雨水以外の安定した水源が必要です。

湿地を造ろうとする時、あるいは水辺のある森を造ろうとする時、一番始めに考えなくてはならないのは、水をどうやって得るかということなのです。雨水だけでは、水辺は維持できません。湧水があれば最高なのですが、期待することが難しいのが現実です。だめなら地下水ということになるのですが、地盤沈下の問題もあり、選ぶことのできない選択の場合もあります。水辺は川のそばにあるのが自然です。取水権の問題がなければ、川の水で湿地はできます。

さて、保護区に目を移してみると、本土に淡水池が３つありますが、安定した水源がありません。こんな不安定な湿地では、鳥たちにとって使い易い訳がありません。湿地というのは、常に一定の水位が必要ということはないのですが、夏や冬の雨の少ない時期に干上がってしまっては困ります。人工的に管理する池であれば、水位を自由にコントロールするだけの水量があるということは、植生をコントロールするのに都合よく、望ましいことなのです。

水が欲しいが水は無し。海水はたくさんあるけど真水はない。観察舎の前の水路も淡水だけど、家庭排水が入って来るのできれいではないし…、まさか水道の水を使う訳にもいかないし……と、悩んでいたら、宇井先生が『この水路の水なら、養殖用の水車で簡単にきれいになるよ』と言われたので、『えっ！本当？』と疑問を抱きながらやってみようか、ということになりました。（詳しくは前号のＰ１０を参照）

早速、汚水処理や水質分析の勉強を始めたのですが、教科書として使われるような本には、私達が知りたいことはあまり書いてありませんでした。しかし、わかってきたことは、今多くの下水処理場で使われている活性汚泥法という方法は、かなりのスグレ者であるが、どうも水に酸素を必要なだけ与えると自然にきれいになってしまうようだ、ということでした。宇井先生に伺っても『そうだ』ということでした。実は、この二つは相反することなのです。前者は、狭い場所で非常に効率よく処理するのですが、活性汚泥というゴミがでます。後者の方法は、ゴミとか悪臭がでないのですが、広い場所と時間を必要とします。（下水道の問題は機会を改めて書く予定です）

水をきれいにする学問は衛生工学と呼ばれ、工学の分野にいますが、実際に水をきれいにするのは、藻類やバクテリアなどの生物です。そして、そのメカニズムはよくわかっていないようです。それから、水質を測定するのは、化学の分野です。したがって、水をきれいにするのは、生物学（微生物学）・化学（分析化学）・工学の学際的な作業ということができます。また、水質の指標として、そこに住む生物を利用することもできます。

いろいろ考えてみると、水車を一台置くだけなので、やってみればなんとかなりそうです。滝沢ハムへ見学に行って、さらに確信を強めました。たとえ、成果があがらなくても、やるだけのことはありそうです。うまくいけば、本土の湿地へ水を供給できるだけでなく、丸浜バードリバーもきれいになります。他の場所でも利用できるかもしれません。

不安と期待の両方を胸に、丸浜バードリバー浄化のプロジェクトが、スタートします。この号が、皆さんの手に届く頃には、事前調査が終わっているはずです。近くに住む方々には、少々御迷惑をかけることがあるかもしれません。水車の音や水の飛沫、そして、うまくいくと、ユスリカの一時的な大量発生…。自然が悪化していく時には、環境の変化に耐えられなくなった種から順に脱落して行き、ある時点で、その環境を得意とする種が発生して、最後には、何もいなくなるか、いてもほんのわずかになってしまいます。

それが、逆の方向に、すなわち、良い環境になっていく時には、他の種が入り込む前に、たまたまそこに生存できることに成ったものが、しばしば、思いがけずに異常発生します。しかし、それは一時的なことで、それを過ぎてさらに良好な環境になると、いろいろな種類がバランスよく住むようになります。悪くするのは簡単だけど、良くするのは大変なことです。一時的な不快期間があるかもしれませんが、御理解をお願いします。問題があったら、どんどん指摘してください。すべてが解決できるかどうかはわかりませんが、できる限り改善の努力はするつもりです。

このプロジェクトは、開かれていて、誰でも参加できます。水質分析は専門家に任せますが、環境の指標としての水底にすんでいる生物の変化は、我々の手で調査します。早い話が、毎月決った量のドブさらいをやって、そこにすむ生き物を記録するだけなのです。わからない種類は、専門家に調べてもらいます。しかし、わかる種類だけ見ていても、かなりのことがわかるとおもいます。メンバーの大多数は素人です。あなたも参加してみませんか。

友の会では、丸浜バードリバーの水質浄化を、今年のテーマとします。成果が実を結んで、野鳥の楽園が名実ともに実現することを望みたいとおもいます。　なお、プロジェクトでは、水に関するレポートを随時発行していく予定です。

鳥の国から　ー観察舎便りー

蓮尾純子

ツルシギが来ました！（3月9日：妙典で3羽、同11日：観察舎で1羽）

コチドリも来たそうです（3月10日：谷津干潟）。

柳が芽吹きました。ニワトコの苞がほぐれてきました。オオイヌノフグリがようやく咲きました。春が来ましたよ！

スズガモが消えて100日――今年の冬はながかった。来る方から「カモいませんね。どうかしたんですか。」と日に何度となく聞かれるたびに、本当に身の細る思い。その分つまみ食いをして、結局太っちゃったみたい。

スズガモばかりか、ヒドリガモ、オナガカモといったおもだったカモまで少なく、時には2、300羽しか鳥が見られない日が続いたこともありました。ヒサン・ムザン・サンタンたるありさま。間の悪いことに、そういう時はカモメの餌付きも悪いんです。特に2月はじめころに餌場の近くで死んだセグロカモメがいたらしく（下旬に死体発見・理由不明）一時カモメが全然寄ってこない時期があったりして、こんなに鳥の少ない冬は初めて。

唯一の救いはサギたちで、餌場に近い方が都合がよいのか、観察舎正面のアシ原にねぐらをとるようになりました。ゴイサギが50ー80羽、アオサギ20羽ほどが日中ずっと見られます。

2月23日には、おびただしいボラの類が水面近くを泳ぐのを見ました。フナの”のっこみ”と同じような行動かも知れません。冬の間東京湾の湾口部ですごしていたものが帰ってきたのでしょう。50cm位の大きいものが多く、サギたちもあきれて見ているだけ。赤い目と大きなウロコがみごとでした。

日増しに濃くなる春の気配。梅は咲いたか、桜はまだかいな……。

バードウィーク特別行事

☆園内観察会　　5月11日（日）

千葉県自然保護課主催で行われる予定。一日に数回、保護区の中を御案内します。まだ園内を歩いたことのない方、この機会に是非御参加下さい。

☆特別展示：「丸浜バードリバーを清流に」　1階展示室

5月10日（土）ー16日（木）

「はおと」でお知らせした通り、丸浜バードリバーの浄化実験が始まります。でもどうして水車で水がきれいになるのでしょう。友の会ではこの浄化のメカニズムなどをわかりやすく展示する予定です。お立ち寄り下さい。

「市川II期埋立問題を考える連続市民講座」に参加して

荒井俊光

いやもう素晴らしい話を聞いてしまったものである。これがこの講座に参加した1人としての素直な実感である。昨年のクリスマスの夜、千葉の干潟を守る会の田久保さんからこの講座が開かれることを聞いた。今まで野鳥、植物等自然一般に関心はあったものの私達の生活、とりわけ汚水処理、廃棄物、埋立等と自然との係わりという総合的見地に立つところまでは至らなかった。全ゆる自然と人間の文明生活との係わりが常に密着した同一円心上のものであること、そして、なかばあきらめぎみな汚水処理問題等もちょっとしたことで解消できるのだというとても貴重な示唆を与えていただいたと感謝している。そして、この海を心配している人達と初めて顔を合わせた。

始めは一回だけと気軽に参加したもののズルズルとひきこまれ毎回参加してしまった。参加者は毎回十数人どまり。このような講座こそ武道館でできるようになったらスゴイなと思う。

講座の資料を見ると東京湾は、まだまだどころか今こそ生き生きと沢山の生物が生きている。その最も重要な所が、東京湾で残された最後の遠浅である行徳の海なのだという。ここで稚魚が育ち外洋に出ていく。野鳥が憩う。潮干狩をする。ノリをとる。漁業をする。

遠浅の海は人間も含めて生命にとって極めて特殊で重要な領域なのだそうである。一度埋めた海は二度と戻らない。埋めなくても方法はいくらもあるのだという。汚水は？廃棄物は？その処理場は？建設[illegible]？税金は？とどんどん問題が出てくる。これを金かけず安い方法でいっきょに解決できるのだという。

この原稿を書くにあたって夜な夜な考えたことではあるが、私を含めて人間は人間の目でしかものをみない。それも自分の目の高さで。でも小学生に話しかけるときは、かがみこんだりして目の高さを合わせるのがいいという。だったらどうして自然の目と目を合わせないのか。海をみるときは魚の目、貝の目になる。鳥をみるときは鳥の目、例えばカンムリカイツブリの目になる。（注：私はまだカンムリカイツブリを見たことがない、グス……）そんなふうになれたらどんなに楽しいだろう。

この講座に参加して感じた、あのたとえようのないぬくもりは自然を介して見つめあう人達のやさしさなのではないかと思った。小さな講座につめこまれた素晴らしい内容。集う人達の熱い瞳。それはいつだったか天声人語にあったあの名言をそのまま映し出しているように感じた。

故郷は近くにありてつくるもの

きえずり

楽しみな新浜の四季・・・・・・・・・・・林　勲

行徳・新浜バードウォッチング（2月9日）開催ご苦労さまでした。

当方は全くの初心者で、山歩きに加えて鳥も楽しんでおります。

古い図鑑など見ますと、行徳地域は有名な水鳥の観察地だったそうで、うかがいました妙典の埋めたて・沖合の都市拡大などまことに残念なことです。

カモ・サギ類が頭上を飛びかう行徳を知ることができて幸福です。

新浜観察場も御猟場の存在により現在の姿を保つことができているわけで複雑な気がします。

シギ・チドリの出る春・秋や、ヨシキリの出る夏と新浜・行徳を再度訪れる日を楽しみにしています。

新入会員

[redacted]

ー事務局よりー

会費の納入をお忘れなく。一般会員　1000円、賛助会員　2000円以上、ジュニア会員（小中学生）　500円。観察舎で預かってもらえます。

郵便振替の場合は仙台　2-6129　行徳野鳥観察舎友の会まで。

行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

☆定例新浜探鳥会（毎月第2日曜日）　　4月13日、5月11日

集合：東西線行徳駅前　　午前10時

解散：行徳野鳥観察舎　　午後3時頃

担当：東　良一、田久保晴孝

持物：昼食、飲物、バス代（大人190円、子供100円）

春の渡りのシーズン到来。ツルシギ、コチドリをはじめいろいろなシギやチドリが顔を揃えます。蓮田の春も今年が見納めになるかもしれません。充分に満喫して下さい。午後はバスで保護区へ。歩きやすい服装、はきもので。小雨決行。

☆定例園内観察会（毎月第1・3日曜日）　4月6日・20日、5月4日・18日

集合：行徳野鳥観察舎前　午後1時半

解散：　　〃　　午後4時頃

担当：観察舎　蓮尾、協賛　友の会

保護区の中も緑めいて、すっかり春らしくなりました。いつの間にかツバメが帰ってきています。のんびりと春の散歩を楽しんでみませんか。

☆夕暮れ観察会　　4月27日（日）

集合：行徳野鳥観察舎　　午後5時

解散：　　〃　　午後7時頃

担当：観察舎　蓮尾

日がすっかり長くなりました。夕暮れ時、保護区の中をひとまわりして、ネグラへむかう鳥などを観察します。まだまだ寒いので上着をお忘れなく。

行徳の海に親しむ会　　4月27日（日）

集合：東西線行徳駅前　　午前10時

解散：塩浜堤防　　正午頃

担当：鈴木裕子[redacted]、荒井俊光[redacted]

行徳には海があり、いろいろな海の暮らしが営まれているのを知っていますか？塩浜堤防を歩き、日頃忘れられがちな行徳の海を見直してみたいと思います。

☆水鳥カウント　　4月29日（火・祝）

恒例の水鳥カウントもすっかり定着しました。難しいものではありませんし、新しいメンバーの参加も大歓迎。参加御希望の方は東[redacted]まで御連絡を。

☆塩浜堤防の釣り糸・ビニール回収大作戦　5月5日（月・祝）

集合：東西線行徳駅前　　午前10時

解散：行徳野鳥観察舎　　午後1時半頃

担当：荒井俊光[redacted]、共催　釣り糸から野鳥を守る会

持物：昼食、軍手、タオル、バス代

回収大作戦ももう3回目。今年は釣りをしている人達を対称に簡単なアンケート調査などもやりたいと考えています。汚れてもよい服装、はきもので。

☆バードウィーク　　5月10日（土）－16日（金）

今年もバードウィークがやってきました。特別行事を行う予定ですので、P8をごらん下さい。

☆丸浜バードリバーを調べよう、その2　　5月25日（日）

集合：行徳野鳥観察舎　　午後1時

解散：　〃　　午後5時頃

担当：寺田一哉[redacted]

持物：長ぐつ、タオル、ビニール手袋

4月上旬には水草が設置され動きはじめる予定です。どんなふうに川がきれいになっていくのでしょう。自分の目で確かめてみませんか？どぶさらいスタイルは前回と同じです。

編集後記

6月初めに出産予定のため、編集の仕事はしばらくお休み。バードリバーの浄化実験など面白そうなことがめじろ押しなのにちょっとばかり残念です。（馨）

○市川の海には　スズガモ、ハマシギ、セグロカモメ、ミユビシギ……たくさんの野鳥が観察できました（3/31）この海が埋立てられたら？！……頑張りましょう（田久保）

すずがも通信　No.37　　1986年4月1日発行

発行所　行徳野鳥観察舎友の会　　年会費　一般1000円、ジュニア 500円

発行人　東　良一[redacted]

事務局[redacted]

編集　田久保晴孝、東　馨子

行徳野鳥観察舎[redacted]